僕の出会った詩人たち#8「蛇口」　　馬野ミキ

詩人として、2ちゃんねる詩・ポエム板での活動歴しかなかった自分が
寺西幹仁さんの手招きで「詩学」に連載を持ち始めた頃、
文京区白山の喫茶「映画館」で開催されていた人気の朗読イベントにゲストとして出演した
美人で、男にも手厳しいことをビシッと言える安田さんという女性がこのイベントを仕切っていた
ゲストは次回のゲストを呼ぶ、という仕組みで
ぼくは当時「詩学」の編集をしていた重兼さんに呼ばれたというカタチで
朗読と弾き語りを交えたステージをした
場にいる人はほぼ知らない人ばかり

そのなかに、蛇口君がいた
これが初対面になる

何かのタイミングで蛇口くんは女性詩をシニカルに揶揄する発言をして
主宰の安田さんに怒られ
会場が笑いに包まれた
自分は詩の朗読会が持つある種の静けさに戸惑っていたから
トイレの帰りに蛇口君に声をかけた
「あなた　おもしろいですねえ」みたいな
これが二人の対話のはじまりだ

「蛇口」
と名乗る前、彼は本名で活動していた
当時、広告屋でありゴールデン街の屋根裏部屋やサブカルの聖地ロフトプラスワンでシリーズものの詩の朗読イベント「鉄腕ポエム」を企画するなど精力的だった
彼は詩の朗読でロフトプラスワンを満員にした　これは功績であると思う
フライヤーの撮影は歌舞伎町のホストやキャバ嬢が撮影に使うスタジオで撮った

僕の出会った詩人たち#4　に描かせてもらった桑原滝弥くんと蛇口君は
「兄弟」と呼び合う仲でもある
そこに少し相席させてもらった時間がある
上田假奈代さんの大阪cocoroomへ
今は亡き銀ちゃんの京都・汚点紫での蛇口くんとの共催「朗魔」2Days朗読会
古い町屋のお店で冷房が無くて扇風機をフルに回転させても出演者も控室もお客も店員も全員が汗だくで
でもあの頃は、詩の朗読で何かが変わる気がしてたんだよな
スポニチに佳作で短編小説が掲載されたこともあったね　いまもうちの本棚にファイリングしたものが残っている
そう、自分が以降出会うことになる朗読界隈の人々と蛇口君はちょっと違った

ゴールデン街に蛇口君が根城にしていた店があり、無邪気に遊びに行ったりした
蛇口君はとても静かに穏やかに自分をカウンターの隣席に迎え入れてくれた

#7 に描かせてもらった　ちんすこうりな　と蛇口くんと三人で
ブログを描いてたことがある
「詩と惑星」http://blog.livedoor.jp/poetryplanet/
「詩と惑星」というホチキス留めの冊子やステッカーも作った
#6 に描かせてもらった　もりくんは
高知県でこの「詩と惑星」を読んでいたそうだ

テキストに関して
一番自分が関わった人間が彼かも知れない

ＳＳＷＳ(シンジュクスポークンワーズスラム)のトーナメントで敗北し
ミキくんと決勝で戦いたかった
という蛇口君は年上だけどとてもかわいい

双極性障害の爆発により蛇口君は東京から熊谷に帰った
そののち、タイプは異なるが自分も双極性障害であるという診断を受けた
日本一暑い街熊谷で蛇口君は無職になり
東京一暑い街練馬で自分もまた彼を追うように無職になった
この頃、二人で交互に空想の物語をブログに連載していた
おれたちは天才だ　いつか天下をとる
南の島でモデルたちをはべらかせて優雅に暮らそう

「いつかのPalallel」http://parallels2020.livedoor.blog/

以下の詩は蛇口君の躁的な動きが美しく表現されている
全文、そのまま掲載させて頂きたい。

「映画」　蛇口

僕を好きにならないとしたら君は病気だ

君のことを考えなかった今日は奇跡だ
今日、僕は生まれて初めて今死にたくないと真剣に思ってどきどきした
映画の脚本が完成したんだ
今日

映画だ
僕の映画だ
うかれて外に出た

車が通り過ぎるのを見てふと怖くなった
ハンドルを切りそこなった車に轢かれたくない
僕の映画はまだ完成していない

今日は一日、映画の脚本を書いていた
事務所で
仕事は何もこなかった
面白いように筆が進んだ
地球を逆上がりした気分
君のことをすっかり忘れて僕は
好きな人を忘れるなんて何て素敵なこと

車が途切れた瞬間にガードレールを飛び越えて
２４時間営業のスーパーマーケットの前で交通誘導をしているガードマンを抱きしめる
ガードマンも力強く抱きしめてくれた
眼鏡が水滴で濡れている
ガードマンは冷静にぬかるんだ道を行く車を誘導する、有能な映画監督だ

僕を好きにならないとしたら君は病気だ
僕のことを思いだして何度も発情してほしい
そんな君を抱きしめよう
虚構も現実も等しく力強く抱きしめよう